



トランスベステイズムについて

立石洋一

Contents

再掲載に当たって

一 女装の「位置」

二 女装の「分類」

三 女装の「現状」

四 女装の「原理」

五 女装の「動機」

六 女装の「未来」

あとがき

★タップすれば各章へジャンプします

再掲載にあたって

この小論は、1996年、私がこのサイトを立ち上げるにあたり書いたものです。

それからすでに15年近い歳月がたち、内容に陳腐化し

ている部分も目立ちます。

特に、「三 女装の「現状」」については、状況が全く変わっています。たとえば、「日本では女装関係のホームページはほとんどない」「日本でさかんなのは、閉じたネットワークであるパソコン通信」というような記述がありますが、これは完全に1996年当時の状況です。ご存じのように、現在では、ネットの女装

系サイトは花盛り。女装趣味の人たちは、当時よりずつと堂々と「表」に出てきています。私自身、おそるおそる「女装小説」のページを立ち上げた当時を思うと、隔世の感があります。(ちなみにこの三章は、当時の状況を列挙してあるだけなので、とばして読んでいただいても、本筋の理解に支障はありません。)

それ以外の章でも、社会の変化や学術的な研究の進展

により、現在では多少認識がずれているところや、用語の選択が時代遅れなところもあります。

そういう意味では改訂すべきだなのでしようが、その時間もなく、また一方で、「女装」に関する分析や論理など、大筋では、現在でも充分に通じる内容だと思いますので、誤字など二・三カ所直しただけで当時のまま掲載しています。

そのあたりをお含みおきの上、お読みください。

2010年10月

— 女装の「位置」 —

1 トランスベステイズム

「女装」という行為については、精神病理学や心理学、あるいは文化人類学などのフィールドでは、「衣

裳倒錯」または「異性装嗜好」というカテゴリーで扱われます。英語ではトランスベステイズム *transvestism*。vest を trans する、という語義です。(最近ではクロス・ドレッシング *cross dressing* という言葉も頻繁に使われます。)

また、こうした嗜好を持つ人々をトランスベステイト *transvestite* と言います。トランスベステイズム、トランスベスタイトともに、「男性の女装」「女性の

男装」をあわせた概念です。TV（テレビのことではありません）と省略されることも多いようです。

（以下、本文でも、transvestism transvestite の両義でTVと略します。）

2 歴史的社会的に見たTV

歴史的に見れば、TVという現象、TVという存在は、さまざまな時代のさまざまな地域の記録に残って

います。

たとえば、ローマ皇帝のネロは、さかんに女装したといえますし、ロシアのロマノフ王朝時代に、一生を女装して暮らしたという貴族もいます。日本でも、ヤマトタケルのクマソ退治の神話にはじまり、歴史上、女装の記録は数多くあります。

また、原始宗教には、女装した男の呪者が信仰の中心になっていることも多く、インドでは今でも、そう

した「女の格好をして女として暮らす男の呪者たち」が、ひとつの社会階層をつくっています。さらに、洋の東西を問わず、「まつり」に際して頻繁に女装が行われることもよく知られています。江戸時代の「おかげ参り」や「ええじゃないか」といった（時代閉塞の打破という意味をも持つ）集団ヒステリー状況でも、女装した男性（男装した女性も）が多く見られたといえます。

そうした意味では、TVは、民俗学で言う「ケ」（日常）に対する「ハレ」の表象のひとつとしてとらえられることもできます。

心理学や精神病理学では、「嗜好」あるいは「趣味」としての女装は、一般に「性的倒錯」「性的病理」の一種として扱われますが、以上のような文化人類学的な背景とけっして無縁ではありません。

いずれにしても、TVは、なにも今の時代だけに見

られる（病理）現象ではなく、人類社会はじまって以来、あらゆる民族のあらゆる文化に通じて見られる現象だと言ってよさそうです。

ただ、それに対して、その文化、その社会全体が、寛容であったか非寛容であったかのちがいがあるだけです。

3 TVは、どう見られるか？

一般に、女装している男性を見て、人々はなんと
言うでしょう？

「おかま」「ニューハーフ」「ゲイ」「ホモ」「性転換」
……と、そんなところでしょうか。

私自身は（やたら「言葉狩り」をするような趣味は
ありませんので）どう呼んでもかまわないと考えてい
るのですが、どうも、それらの概念が、著しく混同し

て使われている傾向があるようには思いません。

TVという現象を正確に捉えるため、まず、それらをここで整理しておきましょう。「おかま」「ニューハーフ」「ゲイ」などは、俗語なのであと回しにして、「ホモ」と「性転換(症)」と「TV」のカテゴリーのちがいについて、次にまとめてみます。

二 女装の「分類」

1 TVは、「ジェンダー」を越境する

TVは、前述したように「衣装倒錯」。(男で言うなら)「女の格好がしてみたい」という人のことです。

「女のように化粧したい」「きれいな服が着たい」、もう少し拡大すれば、「(時には)女として扱われたい」という願望があるわけです。

これを理解するには、ジェンダー gender という概念が必要不可欠です。ジェンダーというのは、おおよそ「性役割」という意味に使われる言葉で、肉体上の性sexに対して、社会的に規定された性を表します。男女の性別から来る社会的な仕事・役割

の区別もそうですが、「男らしさ」や「女らしさ」といった（その文化がもつ）「らしさの規範」をも包含しています。TVはなにより、このジェンダーを越境したいと思う人たちです。（そのため、最近ではTG＝transgenderという言葉もよく用いられます。TVよりもう少し広い概念として使われることが多いようですが。）

「これは男の服装、これが女の服装」「これが男ら

しさ、これが女らしさ」という社会通念による縛りを打ち破ってみたい。いわばタブーを犯したい。(本人がそこまで自覚しているかどうかは別に) そうした願望が根底にあることだけはたしかなようです。そういう意味では、TVは、肉体的なというより、観念的な願望です。

2 TSは、自分の「セックス」に不全感を持つ

そうしたTVに対して、性転換症（精神病理学などでは「症」として扱いますが、これも「性転換指向」とでも言った方がいいように思います）は、TSと言います（※注1）。トランスセクシヤル transsexual の略です。ジェンダーではなく、セックス（肉体的性）そのものを変えてしまいたいと思う人たちのことです。じつは本人たちの認識としては、「変えてしまいたい」というより「自分は肉体的にまちがった性に生

まれてきたのだ」と思っていることのほうが多いようです。「自分は本来女なのに、男の体をもっている。このまちがった肉体を（手術などで）正したい」というのがその願望です。

この点、TVが「女のようになってみたい」と思うのと大きくちがいます。TVは、自分が男だという認識があるからこそ「女のように」なのです。TSの場合、「女に（＝本来の自分に）」なりたいわけです。

また、TVが、たいてい「きれいになりたい」というナルシステイックな傾向を持つのに対して、TSは必ずしも「きれいに」でなくともよいようです。「あたりまえの女になりたい」という願いがその根本だからです。自分のアイデンティティそのものが不安定なこの人たちが、じつはいちばん深刻な問題を抱えています。

※注1

私がこの小論を書いてからしばらくして、埼玉医大の性転

換手術などの報道もあり、世の中に「性同一性障害」という言葉が一般化しました。これは、主にTSと重なる概念だと言っていていいと思います。そういう人たちが世の中にいるのだということを、一般の人たちに知らしめるという意味では有効な概念だと思ふのですが、ただ、それを、「障害」(卍)「病気」と定義して、一般人とはちがうのだと線引きしてしまうことに、私は少なからず抵抗があります。

3 ホモセクシャルは、相手との「関係」が問題

いずれにしても、TV、TSは、自分の現在の性
どこか「居心地の悪さ」を感じているわけですが、こ
れに対してホモセクシャル homosexual は 必ずしも
そうではありません。むしろ、現在の自分の性に肯定
的な場合の方が多くようです。ホモは、言うまでもな
く同性愛。その基本的な願望は、「性愛の対象として
同性に惹かれる」ということです。ですから、なにも、

自分の性を変える必要はないわけです。

「男でありながら男を愛する」「女でありながら女を愛する」という性愛の「関係」にまつわる願望であり、TV、TSが、「自分自身の性」にこだわっているのとは大きく異なります。（その点、女装した人間を見ると「ホモだ」というのは、大きなまちがいです。大多数のホモは、女装などしないものです。）

4 願望のあり方のちがいと、行動としての一致

以上、3つのカテゴリーは「願望のあり方」から分類されるものです。ところが、やっかいなのは、行動様式としては、この3つがかなりの部分重なって現れるということなのです。

(図示すると、次のようになります。)



もともとの願望が3つのうちどれなのか（本人自身も）よくわからないと、
というような中間領域が存在しますし、
どれかの願望から出発した結果、行動
としては、他の領域と区別のつかないところへいつ
しまうということもよくあるからです。

5 TVの中にも、いろいろな行動様式がある

具体的に、TVの場合をとって説明すると――

日常生活は、（性生活をも含め）男としての暮らしをちゃんとやっているけれど、「趣味」「リクリエーション」として女装するという「週末女装派」という人たちがいます。というより、（ゲイボーイなどのプロをのぞけば）TVのうち最も多いのがこの集合です。多くの場合は、日常の仕事とか人間関係とかはノーマ

ルな人と何ら変わりなく送りながら、そこになにがしかのストレスを感じていて、そこから逃れるために、ひとときジェンダーを越境してみたいと考える人たちです。これは、たとえば趣味で模型を作るとか、スポーツをするとかいうのと同じレベルの行動ですし、また、前述した「ハレ」と「ケ」の概念で容易に説明がつくでしょう。

行動としては、鏡の前で女装して楽しむだけの「鏡

派」や、自分の女装写真を撮る「写真派」、また女装して外出し、それをアバンチュールとして楽しむ「外出派」などがあります。「鏡派」や「写真派」は「女のようになってみたい」というファンタジーを追う、要するにナルシシズムです。（模型づくりをする人が、その材料やさまざまな技法にこだわるように、服のブランドや化粧のテクニクにこだわります。）また、「外出派」の場合は、そこに「他人の目」を介在させ

て、「女のように見られたい」「女のように扱われた
い」という回路で、そのファンタジー、ナルシシズム
を実現しているわけです。(スポーツをする人が技の
上達とその「かつこよさ」にこだわるように、女らし
く見せるための仕草などの上達にこだわります。)

ファンタジーという視点から言えば、「女装」とい
う手段が、いわば「アリスの穴」になっていて、その
ことで、現実とはちがう別の世界をかいま見るわけで

す。

いずれにしても、この限りにおいては、四六時中女装しているわけではありませんし、女性ホルモンや手術というような手段を使ってまで肉体を女性化しようとは思いません。（「そんなことをしたら『女装』という楽しみがなくなるじゃないか」と主張する人もいます。）また、ふつう、男を相手にセックスするところまでは考えません。

ところが、中にはその趣味が高じて、自分は女として生きる方がふさわしいのではないかと思い始める人がいます。それで（プロのゲイボーイでもないのに）、ホルモン投与から睾丸摘出手術、豊胸手術までいってしまうわけです。この場合はむしろ、本来の願望はT Sであったにもかかわらず、女装から入って、途中でそのことに気づくというパターンだと考えられます。

また一方で、「女のように見られたい」「女のように扱われたい」という思いを、性愛の場面にまで拡大していく人たちがいます。この場合、当然、その相手は同性である男ということになります。行動としては、まちがいなくホモセクシャルです。しかし、ここで注意したいのは、これが、「男に抱かれたいから女装する」のではなく、「女としての気分をもっと味わいたいから相手に男を選ぶ」という発想の順番だということ

とです。その意味では（相手を利用して）自分のファンタジーを実現するという、きわめて自己中心的な性行動ということになります。このことが、なにより「関係」を重視する純正（？）ホモセクシヤルから、TVが嫌われる理由ともなっています。

いずれにしても、同じTVといっても、TS、ホモセクシヤルとの中間領域においては、さまざまなバリエーションが存在するわけです。

6 ホモセクシャル、TSにとっての「女装」

ホモ、TSの側から見たTVとの中間領域にも少し触れておきましょう。

前述したように、ホモの場合、女装などしないのがふつうです。

ところが、中には「ホモ嫌いのホモ」という面白い人たちがいます。性愛の対象としては男しか考えられ

ないけれど、その人がホモではいやだという、いわゆる「ノンケ好み」という指向です。その場合、相手と恋愛やセックスの関係を持つとすると、出来る限り相手の抵抗感をなくさせなければなりません。そのために、中には、相手が少しでもホモだと感じないでもすむように、(べつに女装が好きなのでもないのに)女装する人たちがいるのです。この場合、先述したTVの場合とは逆で、「男と寝る」ことが目的で、女装

はそのための「方便」でしかありません。しかし、現実の話、「女装を方便としているホモ」なのか、「セックスを利用するTV」なのかは、（その対象となつてベッドをともしないかぎり）容易に判断はつきそうもありません。

TSの場合は、またすこし事情が異なります。

自分の性のアイデンティティに悶々と悩んでいるうちには、たんに「女っぽい男」「男っぽい女」に見える

だけですが（注…TVの場合、日常は、むしろそう見え
ないことの方が多そうですね）、この人たちが、い
ったん「決意」すると、すべてをいっぺんに変えよう
とします。男性TSの場合でいえば、一日24時間女装
していようとし、恋愛の対象としては、当然男
性を選びます。しかし、ここで注意して欲しいのは、
彼ら本人にとってそれは、「女装」でも「ホモセクシ
ヤル」でもないということです。自分の「本来の性に

合った服装」をしているのであり、女が男を愛するちやんとした「異性愛」なのだということになるわけです。「TVが女装を楽しんでいる」のか、「TSが自分の本来のあり方として女の服を着ている」のかも、客観的には、なかなか判断がつかないでしょう。(一般に、TVの方が派手好みで飾り立てるのに対して、TSはどこにでもいるような女性の服装をするというちがいはあるようですが。)

7 「おかま」ゲイ、ゲイボーイ、ニューハーフなど

ここで、前章で述べた、女装する男に対して一般に言われる呼び方についても、簡単に整理しておきましょう。

「おかま」というのは、もともと「陰間へかげま」（江戸時代の男娼）から転じた言葉でしょうから、元来は「男を相手に売春をする男」という意味です。そ

れが一般用語として、女装する男やホモに対して使われているのでしよう。

「ゲイ」は、言うまでもなく、本来英語の「陽気な」という形容詞ですが、それが、スラングとして「女のような男」を表すようになり、女装する男やホモの男を意味するようになります。アメリカの西部開拓時代など「男らしさ」が強調された時代には、男は寡黙で苦み走っていないなければならず、「陽気な男などホモし

か考えられない」という価値観が、そこには存在します。そういう意味では軽蔑のために使われるスラングだったのですが、時代の価値観が変わった現在のアメリカなどでは、それを逆手にとって、ホモセクシヤルやTV、TSなどが（男女を問わず）自分たちをそう総称するようになっていっているのです。その過程で「ゲイ」という言葉の意味は広がり、また肯定的な意味合いを持つようにもなっています。（狭義には、今でも「男

性同性愛者」を表します。)

「ゲイボーイ」「ニューハーフ」は、一般には、要するに「酒席で女装してサービスするプロ」の意味で使われていると思っていいでしょう。「ゲイボーイ」は昭和30年代にアメリカから入ってきた言葉で、戦後すぐには「シスターボーイ」「ブルーボーイ」などと呼ばれていたようです。「ニューハーフ」というのは、おそらくテレビ番組で作られた造語（ジャパニングリ

ツシユですから外国では通じません)で、それが一般に使われるようになったものです。

余談ですが、この「プロ」の存在があるということでは、面白い現象が生じます。TVやTSという傾向をもつ人の多くは(特に10代でそれを自覚してしまつた人は)、多少なりとも、一度はこの道に入ってみようかと思うようです。これなら、仕事として、誰はばかることなく女装できるだろうと考えるからです。と

ころが、実際にそれを職業とした場合、ゲイボーイとして大成（？）するのはTVの方で、TSの場合は不幸になるパターンがほとんどのようです。一見、「24時間女装していたい、体も変えたい」と思うTSの方がうまくいきそうな気がしますが、じつはゲイボーイ、ニューハーフというのは、「女を演じる男」を売り物にしているわけで、「ふつうの当たり前の女」であることをめざすTSには、居心地の悪さはけっして変わ

りません。むしろ、たいていの場合、さらに大きなアイデンティティの不安（「女を演じる男を演じる女」）を抱えることになります。

8 私がTVに関心を持つ理由

以上述べてきたように、一概に「女装」といっても、その願望の所在、形態はさまざまです。

その中で、私は、TVという指向に最も自分に近い

感覚を持ちますし、関心もあります。

というのは、3つの中で、客観的にはTVがいちばん「ばかばかしい」からです。

「自分が何者であるのかわからない」という性のアイデンティティの不安をかかえるTSは、本人にとっては深刻で切実な問題です。また、「同性しか愛せない」というホモセクシヤルも、社会生活を送る上では、深刻な問題をかかえることになります。（そうした自

己の指向と社会とのギャップに悩んだすえに、実生活の面でも自分に嘘をつかず、堂々とそんな「しんどい生き方」を選択している人に、私は畏敬の念すら感じます。

それにくらべて、「ボク、時には女の子もやってみたいもん」というTVは、じつにお気楽で、ナルシステイックで、エゴセントリックで、欲張りで、……ばかばかしい存在です。

しかし、TSがもしその望みを叶えることができ、手術で体を変え、女として生活できるようになったとしたら（それは、本人にとってはやっと得られた心の平安でしょうから、私もそうなって欲しいと願わずにはいられません）、その行き着く先は、何度も書いてきたように「どこにでもいる当たり前前の女」です。けつきよく、最後は既存の男女観の中にからめ取られていくわけです。

また、ホモセクシャルについても、そこで重要なのが「関係」、つまり「愛の相手が同性である」ということだとすると、それにこだわっている限りは（もちろん、同性間であろうがすばらしい恋愛関係は成立する、と私は思っています）、逆の意味で性別という縛りにとらわれているということになります。

ところが、TVというばかばかしい存在は、それ自体として「ジェンダーというもののばかばかしさ」を

カリカチュアしてしまおうのです。（これは、あとで論ずることになると思いますが）しよせんは人為的なものでしかない人間の性別とそのボーダーを、あいまいに取り崩して往復する存在は、硬直化した男女観に風穴をあける意味を持つと思います。

「女のようにになりたい」の中の「ように」という部分が私は重要だと思っています。要するに女装はフェイクです。しよせん偽物に過ぎません。が、では、偽

物があるなら、本物はあるのかという問題がそこからあぶり出される気がします。「男らしく」「女らしく」と、「らしさ」をいうなら、その「らしさ」の実体になっている「男」とは、「女」とは、いったいなにをもっているのか、という疑問に突き当たるのです。

9 TVの容認についての男女差

なんだか、もう結論めいたことを書いてしまってい

る気がしますが、もうひとつ、ごく具体的に、私の問題意識の契機になっていることを書いておきたいと思っています。

ここまで、じつは意識的にあいまいにしてきたのですが、TV、TS、ホモセクシャルなどということとは、べつに男だけに限った問題ではありません。女性にも当然あります。ところが、女性のTSはたしかにいますし、女性のホモセクシャル（いわゆるレスビアンで

すもまちがいなくいるのに、女性のTVというのは、現在の日本では見あたりません。いえ、じつはたくさんいるのですが、問題にはならないのです。

女性の場合もTSやホモセクシャルは「性倒錯」の範疇に入りますが、TVに関しては、ファッションとかモードというカテゴリーの中で扱われる対象だからです。

要するに、女性の場合は、スカートでもパンツでも

どちらをはいてもかまわないわけですし、シヨートヘアや男っぽい服装は、マニツシユルツクとして許容されます。もし、男物の背広をそのまま着ていたとしても、それがモードとしておかしくなければ、ファツシヨセンスがいいということになるのです。

ところが男の場合、一般には、スカートをはくことはできませんし、化粧をすることも許されません。サラリーマンなどは、仕事の場では背広にネクタイとい

うワンパターンの服装を、事実上強要されるわけです。

男と女を比べれば、ジェンダーの許容範囲、自由度は、男の方が格段に狭いことは明らかです。

と、こう書くと、「だって、男がスカートはいたら気持ち悪いでしょ」という反論が返ってくると思います。でも、そう感じることで自体が、ジェンダーの規範に左右されている結果なのだと思います。逆に、女が

ズボンをはくことが「気持ち悪い」（どころか「犯罪」）とされた社会すら（そんなに昔でなく、20世紀にも）あつたのですから。

また一方では、フェミニズムの側からの反論も予想されます。「男の方が自由度が狭いと言うけれど、それはおかしい。世の中ははまだ男が権力を握っている男社会じゃないの」という。

私も、まさにそのとおりだと思います。社会システ

ム上、いまだ女性が差別されていることはまちがいありません。たとえば就職差別ひとつとっても、憲法が保証する「両性の平等」などまったく空論化していると言っているではないでしょうか。

でも、だからこそ、私はジェンダーの問題は重要だと思っていますのです。けつきよくのところ、服装をはじめとして、男の方が「らしさ」を強要されるのは、それが、男の権威づけや権力の象徴としていまだ機能

しているからだという気がします。

要するに、背広にネクタイというのは、いわば聖職者の法衣であり、軍隊の軍服です。想像力も創造力も乏しいくせに、その無能力を同じ濃紺の背広という「権威」で隠した現代の司祭たちが、今日も、中央省庁や国会や財界団体の会議室で、パワーポリテイクスのゲームを繰り返しています。そんな彼らを頂点とするマツチヨ主義のピラミッドこそが、女性差別の根元なの

ではないでしょうか。

この際、男も、ジェンダーの縛りから解放されて、そんなくだらない権威のヒエラルヒーを、ずぶずぶになし崩してしまった方が、女性のためにもなると思います。

もちろん、だからと言って、男はみんな女装すべきだなどということを行うつもりはありません。ただ、そういう趣味を平気で許容することが、そんな硬直し

た男女観と、それに基づく社会システムを打破する突破口になるとは思うのです。

三 女装の「現状」

1 アメリカのTV

たとえば、インターネットのWWW検索システムとして有名な「Yahoo!」で、セクシヤリテイを話題としたホームページのリストを見ていると、その中に、「T

V・T・G」という分類があり、膨大な数のホームページがリンクを張られています。そのうちのひとつにアクセスしてみると、たいていの場合、女装愛好家たちが女装に対する考え方を述べていたり、化粧など女装のノウハウが書いてあったりします。そして、まずまちがいなく、自分たちの女装写真が並べられています。あるいは、女装用品専門の通信販売のカタログページということもあります。

アメリカのTVたちは、今確実に、その数が増えていつているようです。

——というより、以前から多くいたのが、そのベールを脱いで前面に出てくるようになったと言った方が正しいのかもしれない。しかも、彼らの多くは、連携し、自分たちの存在をさかんにアピールするようにもなっています。

各地で、TVたちが集まるコンソーシアムやワーク

シヨップが頻繁に開かれているらしく、その「お知らせ」もそれらのホームページによく掲載されていますし、年に一度、全米のTVたちが集まる「大会」もあるようです。

おそらくアメリカでは、これまで、日本以上に「性的アブノーマル」に対する偏見がきつく、そうした嗜好を持つ人たちは、ひとり秘かに息を潜めていたのでしよう。それが、ここ十年あまりの間にその社会的偏

見が急速に薄らぎ、ゲームーブメントと帯同するかたちで、社会の表面に出てきたと見ていいと思います。長い間抑圧されてきた反動からか、まるで堰を切ったようにアグレッシブに自己主張し出しているのです。

2 日本のTV

それにくらべると、日本のTVたちはおとなしいも

のです。社会に対してそんなに声高に叫ぶこともなく、片隅で、秘かに女装を楽しんでいます。（一方でこれは、伝統的には日本の方が——歌舞伎の女形の伝統や、小姓、陰間などの存在もあり——、男性の女装に対する許容度が広いことを示しているのかもしれない。たとえば女装して歩いていたりとしても、それだけで警察に捕まるようなことはありませんから。アメリカの南部などには、未だにそんなところがあるようです。）

数の問題で言えば、（もちろん正確な数字などつかみようもありませんが）日本にも、アメリカに負けな
いほど、実際に行方としての女装をしているTVは多
いと思います。たいていは鏡の前でひとり秘かに、と
いうパターンでしょうが、それでも、社会の表面に出
てきている部分は、少なからずあります。

政令指定都市級の街なら、少なくとも3つや4つは
いわゆる「女装スナック」（客、つまり素人が女装で

きるバー）という店がありますし、また、酒などを出す飲食店ではなく、同好の士が集まって女装するサロンのような場所も（営利・非営利を含め）、東京、大阪、名古屋といった大都市にはあります。最も有名なところでは、東京の「エリザベス」。これは、ときどきテレビなどでも紹介されますから、ご存じの方も多いでしょう。

また、この「エリザベス」を経営する同じ会社が、

全国の女装愛好家に向けて出している商業誌が「QUEEN」です。他にも、同人誌的発行形態をとる「ひまわり」という女装雑誌も比較的多い発行部数を持っていると思います。こちらは、あの、原宿ホコ天に乙女チックファッションで出没するおじさんとして有名な「キャンディーミルキー」さんという方が中心になって出している雑誌です。

TV、女装をテーマとするWWWのホームページは、

私自身は寡聞にしてまだ見ていませんが、これだけホームページが花盛りなのですから、日本にもひとつやふたつはおそらくあるでしょう。それよりも活発なのは、パソコン通信のBBSです。東京の「Host of Fairy」[EON]、関西の「スワンの夢」など、女装愛好家専門のネットがいくつか存在し、会員数一〇〇〇人以上というところも少なくありません。

いずれにしても、日本の場合は、女装愛好家どうし

がコミュニケーションを持つ場でも、閉じたネットワークの中でお互いが仲良く交流するという趣旨がほとんどで、アメリカのように社会に対して自分たちの存在をアピールしているというような意思はないようです。これはこれで、なかなか日本的だとは思いますが。

とは言え、日本でも、TVという人たちはけっして特異な存在ではありません。

そんな人には会ったことがないというあなたのごく身近にも、週末には秘かに女装しているという人がいる可能性があります。

四 女装の「原理」

1 TVは「異常」か？

男性のTV、つまり女装する男は、ノーマルな人か
らは、ふつう「異常な奴」と見られるのだと思います。

たしかに数の点から言えばマイノリティでしようし、スタンダードでないという意味では、異「常」にちがいありません。

しかし、人間としての精神構造上、異常、つまり病的かという点、私はそうではないと思います。（その言い切りも、厳密には正確でない気がしますが、そのへんは、これから順次述べていきます。）

なぜ異常ではないかと言えば、ある意味で、それが

きわめて「人間的な」行為だと思っからです。「少なくとも動物にはTVなどということはない」という意味において。

2 「異常」「倒錯」とはなにか？

では、人間にとって「異常」とか「倒錯」とかいうことは、どういうことなのか、ここで（「女装」ということから少し離れて）考えてみたいと思います。

前項でも書いたように、女装に限らず、性的に「異常」「倒錯」というのは（サド・マゾから、スカトロ、カニバリズムに至るまで）、人間にしか見られない行動でしよう。

と、こう言うと、「でも、アザラシなんかは、一夫多妻のハレムをつくって、オスがメスを力づくで支配してるじゃないか」とか、「カマキリに至っては、交尾のあと、メスがオスを食べるんだぜ」などという反

論が返ってくるかもしれない。でも、それは、彼らの本能に沿ってやっていることです。

3 本能Ⅱ最適化されたシステム

「本能」という言葉は、「本能のままに生きている」とかいう使い方をされるために、不当に過小評価されることの多い言葉だと思います。「本能」を正確に言えば、動物が生きていくための天与のシステムです。

もう少し厳密に規定すれば「動物が環境に適応しながら個の保存と種の保存をしていくために、あらかじめ遺伝子の中に組み込まれている制御システム」だといえればいいでしょうか。防御本能とか食性とかは、個の保存のためのシステムですし、生殖本能は、言うまでもなく種の保存のためのシステムです。環境との（つまり現実との）整合性のきわめて高い良質なシステムだと思いません。

アザラシも、カマキリも、けっしてその種固有のシステムから逸脱してはいません。「このカマキリはオスを食べたけれど、あのカマキリは優しいから食べなかつた」などということはありません。メスがオスを食べるのは、カマキリにとって「異常」でも「倒錯」でもなく、本能というシステムに沿った正常な生殖行為です。

ところが、人間ときた日には、逸脱のしつぱなしで

す。(そういう意味で、人間の「ふしだら」な性行動を「本能のままに」とか「獣のような」と形容するのは、獣に対して失礼この上ない言い方でしょう。)

では、なぜ、人間だけに、そんな性的逸脱Ⅱ「異常」で「倒錯」した性行動が起こるのか。その構造は、たとえば、こんなメタファで説明がつくように思います。

4 汎用コンピュータとしての人間

動物にとって、運動器官や消化器官などの肉体はハードウェアでしょう。そして、それを制御するソフトウェアが脳内にあることになります。脳幹だとか間脳だとか大脳新皮質だとかのややこしい説明はこの際省いて、「本能」というものを考えると、あらかじめ与えられているという意味で、それは、ROMに書かれたシステムソフトということになります。通常はリ

ドオンリーで、書き換え不能です。人間以外の動物は、おおよそ、このROMだけで生きているわけです。だから、動物は、いわば専用機です。

それに対して、人間は、そのROMに書かれたシステムソフトの部分（つまり本能）がきわめて小さく、その上のRAMにOSやアプリケーションソフトが読み込まれてはじめて働く汎用コンピュータだといえるでしょう。経験とか教育とかがインストールされない

ことには、意味のある機能はしないわけです。また、つねに新たなソフトのインストールが可能です。バージョンアップもできますし、アプリケーションソフトをたくさんのせれば、マルチパーパス、マルチタスクなどという器用なまねもできます。そして、それらのアプリを支えるOSが、いわば個々の民族の言語や伝統、つまり文化でしょう。（そう言えば、「WindowsとMacでは同じデータも読み込めないんだよね」みたい

なこと、今、世界中で起こっています。）

人間だけが他の動物とちがって、地球上いたる所の環境に適応して広がることができたのは、おそらくは、この「汎用性」のおかげでしょう。

ところが、どんなソフトでもものるということとは、ビジネスソフトではない（とりあえずの生存とはなんの関係もない）ゲームソフトやエッチソフトもそこで動くということ。けっきょく、さまざまな逸脱とい

うのは、簡単に言えばそういうことなのでしよう。

（このコンピュータのメタファを使った説明を、調子のよいこじつけと感じる方も多いと思いますが——事実、こじつけにはちがいないのですが——、あながち根拠のないこじつけではないと思っています。人間が道具を作ってきた歴史は、自分自身や他の動物の肉体の機能の模倣・拡張からはじまると、よく言われます。その最新の成果がコンピュータであるとするなら、コ

ンピュータは、メタファどころか、人間をモデルとしたレプリカントそのものだからです。

5 バグだらけの本能

構造はそういうことだとして、でもまだ、そんな構造がどうしてできたのか、つまり、本能というROMの部分はどうして小さくなったのか、その説明がついていません。

いえ、じつを言うと、私の実感としては、構造の説明としても、前項の説明ではじゅうぶんでないという気がしています。どうも、人間の場合、本能が小さくなったというより、そのROMが（あるいはそこに書かれたプログラムが）不良品で、「バグだらけ」だということなのではないかという気がするのです。

というのは、エロス（あるいは、フロイト流に言えばリビドー）というような人間のエネルギーの強さを

見ると、どう考えても、本能そのものが（量的に）小さくなつたとは思えないからです。

本能というプログラムのコーディングだけはとりあえずされているのに、それがじゅうぶんに構造化されていない。だから、プログラムの断片が個々に暴走してしまふ。人間の本能は、そんなバグでいっぱいなのではないでしょうか。

重いプログラムのわりにはバグだらけで、そのまま

では使いものにならない（つまり、個の保存も種の保存もままならない）から、しかたなく、文化というソフトウェアで「パッチあて」をした。前項で書いた人間の「汎用性」というのも（けっしてそんなに威張れる話ではなく）、単にその結果得られた副産物にすぎないのではないか。と、そんな感じがするのです。

6 「生理的早産説」とバグだらけの本能

本能がバグだらけだという理由は、たとえば、アドルフ・ポルトマンの「生理的早産説」などでも説明がつくと思います。

ポルトマンによれば、人間は、「生理的に早産が習慣化してしまったサル」なのだといいます。おそらくは直立二足歩行のせいで（つまり、子宮が「縦位置」についているせいで）、本来なら胎児が胎内で発育す

るのに必要な時間、母親のお腹の中にとどまっていることができなくなつた。いわば未熟児のまま、早産されることがふつうになつてしまつた動物が人間だといふことです。

世の中に生存する多くの動物の中で、生まれ落ちたままの状態では一日たりとも生存できないのは、おそらく人間だけでしよう（サルも多少、そのきらいはあります）。なにしろ人間の赤ん坊ときたら、ウマや

キリンのように歩くことはもちろん、自ら母親の乳ま
で這ってたどり着くこともできないのですから。目さ
えほとんど見えない状態です。

目がないわけではない。手や足もそろっている。そ
んなふうに機能の要素はとりあえずあるのに、それが
ちゃんと使えるほど発育しない状態で生まれてきてし
まうわけです。

生存のためのシステムである本能にも、これと同じ

ことが言えるのではないでしょうか。とりあえず、プログラムらしきものは書いてあるけれど、それをじゅうぶんにデバッグできないうちに「納期」が来てしまう。その結果、バグだらけのシステムプログラムで、人間はこの世に「出荷」されるというわけです。

こんな不完全な動物が、これまで絶滅せずに生存してきたことが、不思議です。もしかすると、サルから人間になる過程で、ほとんどの群はすぐに絶滅したの

かもしれません。しかし、たまたま、あるひとつの（あるいは少数の）群が、群というネットワーク機能を最大限に使うことで、かろうじて、そのぼろぼろの本能にパッチをあてることに成功した。それが、文化の誕生の瞬間であり、言語の誕生の瞬間なのだと思います。

7 文化Ⅱ パッチプログラムの限界

しかし、パッチは、しよせんパッチに過ぎません。

どこまで行ってもつぎはぎなのです。本来の生存のためのシステムがバグだらけなのだから、どこかに必ずほころびが現れます。

あらゆる方向に向いて暴走しようとする本能に、ちよつとやそつとのパッチ（倫理や社会通念、法や制度など）をあてるくらいでは足りそうもありません。で

も、やたらパッチをあてまくればいいかといえ、そうでもないようです。時には、そのパッチをあてたところが、システムプログラムの新たな思わぬ方向への暴走を招いたりもするからです。さらに、まるつきり見当はずれなところにパッチをあてることも多いものです。その結果、パッチプログラム自体が暴走してしまうことさえあります。

それは、性についてもまったく同じです。というよ

り、ネットワーク機能が働きにくいスタンダードアローンな行為としての性行動の面で、よりその傾向が強くなるように思います。

と、こういう書き方をすると、社会の中の一部の人が「暴走する」のだと受け取る方もいるでしょうが、ここで言っているのは、そういうことではありません。人間の性行動というのは、いわばすべてが「暴走」の要素を含んでいるものであり、「逸脱」しているとい

うことです。

8 人間の性はそもそも「多形倒錯」

本来、哺乳類などの生殖のシステムを見てみると、
たいていの場合は「さかり」というシーズンがあり、
子供の成育にとって最も適した自然環境の時期に出産
が重なるように出来ています。そのことひとつとって
も、きわめて環境との整合性のある最適化されたシス

テムだといえます。いずれにしても、動物の性行動と
いうのは、あくまで「生殖のための行為」です。（一
部のサルには、コミュニケーションや群の維持のため
に生殖行為を利用するものがあるようですが……。）

これに対して人間の場合は、「さかり」はありません
んし、むしろ、ほとんどの性行為は（意識の上でも、
また実態としても）「子供をつくるため」ではありま
せん。これを、本来の種の保存のためのシステムから

の「暴走」「逸脱」と呼ばずして、他にどう呼べばよいのでしよう。

では、「子供をつくるため」でないとするなら、人間は、なんのためにセックスをしているでしょう。多くは快樂のためであり、と同時に愛情の確認やコミニケーションや、時には征服欲や、あるいは、打算や保身や出世や詐欺や……その他もろもろのためでありうるわけです。

つまり、バグだらけのROMを抱えている結果として、人間の性行動は、本来の動物のあり方から言えば、すべてが「異常」であり「倒錯」だと言っているものになっています。

これが、フロイトの言う「人間の性はそもそも多形倒錯である」ということなのでしよう。

9 セックスを思いつけない人間

さらに大事なことは、このバグだらけのROMは、単に暴走するというだけでなく、そのままでは本来のタスクすら満足には果たせないということなのです。

動物の場合、たとえば、子供の頃に捕らえたひとつがいを、動物園の檻の中に入れておいても、成獣となり「さかり」の時期が来れば、たいていは自然に生殖行為に及ぶものです。（ゴリラなど一部の類人猿はそ

うでもないらしいのですが……。これは、つまり、本能の中にその「やり方」までがプログラムされているということなのです。

ところが人間の場合、何らの「学習」もなしにセックスすることは、おそらく困難でしょう。もちろん、ここで言う「学習」とは、学校での「性教育」など（だけ）を指しているわけではありません。「セックス」という言葉（つまり観念）に興味を持ち、友達どうしで

「情報の交換」をしたり、辞書などを調べた経験は誰しもあると思います。また、その類のノウハウ本はいくらでもあります。そういう「学習」の経験をたどらないことには、具体的な「セックスの方法」を、人間は「思いつかない」のではないでしょうか。

（かつて、「青い珊瑚礁」というブルック・シールズ主演の映画がありました。難破船に乗り合わせた少年と少女が無人島にたどり着き、二人だけで暮らす間に

子供ができてしまうというようなストーリーでした
が、あんなことが本当に可能かどうか、たぶんに疑わ
しいと思います。）

10 何にでもとりつく性のエネルギー

人間の生殖本能は、勝手に暴走するばかりか、ほか
っておけば、その「正しいやり方」にはたどりつけま
せん。もつと有り体に言えば「成熟した異性の性器」

には到達できないのです。

その結果、そのエネルギーは、容易に他のものにとりついてしまいます。それは、未成熟の子供でもいいわけですし、同性でもいいわけです。さらに言えば、鞭とローソクというシチュエーションでも、死体でも、人間以外の動物でも、なんなら、下着や赤いハイヒールでも、そして、蝶のコレクションやパソコン、模型づくりや、過度のスポーツで自分をいじめることでも、

権力を握るために執念を燃やすことでも、なんでもい
いわけです。

11 ポルノグラフィの必然性

当然、そのままでは、性のエネルギーが生殖行為に
つながらないわけですから、「種の保存」などおぼつ
かないでしょう。そこで文化は、その暴走に必至にな
ってパッチあてをしようとしています。

ポルノグラフィは、有史以前からあるのだといえます。遺跡の壁に、男女が睦み合っている絵が発見される例は、数多くあります。

要するにポルノは、人間の性のエネルギーを、「正しく」異性の性器へと導くために、どうしても必要なものなのだと思います。（とはいっても、ここにも人間の「バグだらけ」の本能のシステムが反映して、性のエネルギーを「まちがった」方向へ導こうとする

ポルノもたくさんあります。たとえば……私の小説だとか。

ともかく、たいていのポルノは、「密壺」だとか「濡れた入り江」だとか、その他じつにさまざまな形容の限りをつくし、性器をすばらしいもの、まるで人生最終最大の到達点であるかのように描き出します。つまり、あらゆる方向に向かおうとする人間の性のエネルギーを、なんとか異性の性器へと向かわせるために、

ポルノは、人類文化が採用した「涙ぐましいパッチプログラム」なのだと言えるでしょう。

12 「猥褻」の本質

そこで、もうひとつ、「猥褻」ということも考えてみたいと思います。

「ヘアヌード、是か非か」という論争などばかばかしいかぎりですが、「性器を見せない」というタブー

には、なにより、性器を「神聖」なものにしておこうという意図がはたらいているのだと思います。

本来、性器など、要するに人間の器官のひとつに過ぎません。

それを「隠す」ことによって、「特別なもの」とする必要が、どうしてもあるのでしょうか。「神聖」で「特別」だから見てみたい。そこにたどり着きたい。なにかそれを「宝物」のように扱うことで、暴走する人間

の性エネルギーを、そちらに向かわせようとしているわけです。

そういう意味では、刑法の「猥褻物陳列罪」の条項は（「表現の自由」という点からは問題があるにしても）、人類文化の「正しい」戦略だといえるでしょう。

13 物語としての愛と性

前項では、わかりやすい例としてポルノと言ったのですが、じつは、「愛と性」にまつわるほとんどの物語は、人間を異性とのセックスに至らしめるためのパッチプログラムとしての機能を果たしているのだと言っている。もちろん、愛を描いたすべての小説や演劇や映画がそのためだけにあるなどとは言いません。しかし、それに感動し、共感する（あるいは劣

情をそそられる)ことで、異性に対する愛情(や欲望)が補完されることは事実でしょう。

逆に言えば、そうした「物語というパッチプログラム」なしには、人間は、性のエネルギーを生殖行動につなげることはできないのだと思います。小説や映画ではないとしても、人間は、必ず何らかの物語にあてはめることで、二人の関係を築くものです。

「愛によって結ばれた二人」は、「愛」という物語(つ

まり、パッチプログラム)の中に自分たちの関係を位置づけてセックスに至るわけです。もちろん、この「愛」を「運命」に変えて、「運命によって結ばれた二人」という物語も成立します。

あるいは「信仰によって結ばれた二人」でもいいわけですし、「夢」でも「理想」でもいい。「趣味」でもいいし、場合によっては「お金」という物語でもいい。さらに言えば「本能によって結ばれた二人」とい

う関係もあり得ます。（もちろんこの場合の「本能」は、「本能という物語」であり、先刻から言い続けている「バグだらけのROM」でも、動物本来の「種の保存のためのシステム」でもありません。）

いずれにしても人は、それらのうちのどれかの（あるいはその二人独自の）物語を採用して、そのプログラムに沿って恋に落ち、セックスに至るといふ道筋をたどるものです。（人間以外の動物の場合は、そんな

面倒で不健全なこととはせず、天与のシステムに沿って、ただ生殖するだけです。

14 「男と女」という物語

そして、そうだとするならば、「男と女」という両極の存在もまた、人為的な「物語」に過ぎないのだと思います。「世の中には、男と女という二種類の人間しかいない。正反対の存在だからお互いに惹かれ合うの

だ」という大物語が前提としてあり、その大物語のもとで（前述したような）それぞれの小物語がつけられた方が、まちがいをなく「種の保存」には都合がいいわけです。「男と女」という物語も、けつきよくは、文化によってつくられたパッチプログラムに他ならないのではないでしょうか。

15 「性」は本当に二項対立か？

と、そんな言い方をすると、「馬鹿なことを言っている」とはいけない。男と女では体の作りがちがうじゃないか。動物としてのオスとメスの区別は明確にあるだろう」という反論が返ってきてそうです。

たしかに、男の体と女の体では構造がちがいます。しかし、その肉体にしても、男と女という単純な二分法が成り立つほど簡単なことではないらしいのです。

「性は、連続性を持つものである」というのが、ここ半世紀ばかりの生物学・生理学の常識です。

動物の雌雄を判別するには、だいたい4つの方法が用いられます。歴史の古いものから並べると――まず1つ目は、外性器の形態のちがい。要するにペニスかヴァギナかのちがいです。2つ目は、内性器のちがい。哺乳類で言えば、精巣なのか卵巣と子宮なのかのちがいです。3つ目は、性ホルモンの構成のちがい。男性

ホルモンか女性ホルモンかのちがいです。そして4つ目が、遺伝子、つまり性染色体のちがいです。XYなのかXXなのかというちがいです。

このうち、1番目の外性器と2番目の内性器は、仮性半陰陽（外性器と内性器が合致しない形態をしている）、真性半陰陽（外性器・内性器が両性の特徴を持っている）という大きなくりに含まれる多種多様な中間体の例が、想像以上に多くあります。（※注2）

3つ目のホルモンにしても、オスの体内にも女性ホルモンはありますし、メスも男性ホルモンを多く持っています。そして、その構成比の個体差はさまざまです。だいいち、「コレステロールから、まず女性ホルモンである黄体ホルモンがつくられ、それがテストステロンなどの男性ホルモンにつくりかえられ、さらにその男性ホルモンを芳香化してエストラジオールなどの女性ホルモンとなる」という、体内での性ホルモン

の組成過程ひとつを見ても、それが相反する別のものではなく、連続性のあるひとつのものだということが言えると思います。

現在、最も確かな判別法としてオリソピックのセックスチェックなどにも用いられているのが、4番目の性染色体によるものです。しかし、じつはこれにも、さまざまな性染色体異常（つまり中間体）の症例が報告されています。（※注2）それに、そんなセックスチ

エックが必要だということ自体が、4つの基準で判別した男女の性が、実際にはそれぞれ食い違ってしまう、ボーダーのあいまいなものであることの証明に他なりません。

つまり、生物学的には、オスとメスという「性」は、さまざまな相で連続性を持つ「傾向」なのであって、けっして二項対立するものではありません。(※注3)

にもかかわらず、(そのセックスチエックに典型的

に現れているように 人間は、是が非でも男女を分けようとしています。そこには、必死になって「男と女という物語」を守ろうとする、人類文化の恣意性を感じずにはいられません。(※注4)

※注2 現在、医学用語としては「性分化疾患」と分類され、俗稱としては「インターセックスⅡIS」とも呼ばれるこうした方々が、実際にどのくらいいるのか、正式な統計はありません。程度や形態がさまざまに診断(線引き)が難しいのと、(現実には「男性」「女性」として暮らしている方々の)プライバシー保護という立場から、

「わからない」というのが公式見解のよう。ただ、非公式には、その発現率が2000人に1人とも4500人に1人ともいわれま
す。ちなみに、やはり偶発的な染色体異常による障害、ダウン症の
発現率が2000人に1人くらいですから、ダウン症の方を見かけ
る程度には、ISの方がいると考えていいのでしよう。

※注3　そういう意味では、われわれ東洋人は、昔から西洋人にく
らべて、より正しい認識をしてきたと言えるかも知れません。英語
の sex は、sect や section と語源的には同じで、「分ける」「分
かれる」という意味から派生した言葉です。つまり、男女の別を分

けるということです。それに対し、日本語（もともとは中国語）の「性」は、元来、「性質」とか「性向」とかいう意味でしょう。文字どおり「傾向」を表すわけで、そこには「分ける」「分かれる」という意図は希薄です。

※注4 「人類文化の戦略」とか「人類文化の恣意性」とかいう表現に、「神の意志のようなものを想定しているのか？」という質問がありました。もちろん、それらは比喩的な表現です。人類の文化そのものが（集団無意識的なものであれ）意志や意識を持っているとは思いませんし、そこに「見えざる手」のようなものが働いて

いるとも思っていないません。人類文化が、男女を区別し、人々にジェンダーを押しつけてくることになってしまったのは、ダーウインの「自然淘汰説」的な作用が働いた結果だと思います。たまたまそういう「ジェンダー幻想」を持った種族だけが（ボロボロの本能を補完することに成功し）生き延び、そういう幻想を持たなかった種族は（欠陥品の本能のせいで、まともな生殖ができず）滅んでしまっただ。その結果、生き残った種族の文化が人類全体の支配的な文化になった、ということです。しかし、そこで大事なのは、それは、「妊娠」とか「出産」とかに対して人為的な操作がまったくできない時代に起こったことに過ぎないということです。「人工授精」をはじ

め、不妊医療がふつうに行われ、遺伝子医療、さらにはヒトクローンまでもが組上に上っている現代、たとえば、そういう幻想をすべて捨て去ってしまったとしても（あとで述べるように、それはたぶん無理でしょうが）、そのことで、人類が減びることはないでしょう。

16 「らしさ」はどこまで天与のものか？

生物学的に見てもそんなあいまいな基盤の上に立つ

ている「性別」を唯一の根拠として、「男らしさ」「女らしさ」、つまりジェンダーは規定されているのです。逆に言えば、その根拠が脆弱だからこそ「らしさ」が強調されるのかも知れませんが、また、本来なら、その脆弱さを補完するはずの本能がいいかげんだからこそ、「らしさ」のパッチあてをしなければならぬのでしょう。

いずれにしても、いわゆる「男らしさ」「女らしさ」

として語られるもののほとんどは、後天的な「物語」なのであって、天与のものであるとは思えません。

17 「能動と受動」の神話

その「男らしさ、女らしさ」という物語の最も中心にあって、かつ、多くの人に信じ込まれているのが、セックスの場での「能動と受動」ということです。

男はアグレッシブに女を犯し、女の方はあくまで受

け身でそれを受け入れるのだという構図が、性の物語の中ではスタンダードであり、それが、男と女の属性だとも語られます。そして、男の「強さ」「剛毅さ」「活発さ」、女の「弱さ」「やさしさ」「おとなしさ」というのも、おおよそ、その構図から導き出されてくるものでしょう。

そう言われる根拠は、要するに構造上、（少々下品な言い方になります）男は「突っ込む」側であり、

女は「突っ込まれる」側だから、ということでしょう。

しかし、これなど、完全に（文化としての）レトリックの問題だと思います。「女はくわえ込む側で、男はくわえ込まれる側だ」と言ってしまうえば、簡単に逆転してしまおうのですから。

けつきよくのところ、「男と女の物語」の最大のものである「能動性と受動性の神話」こそ、バグだらけ

の性本能に対する、最大のパッチプログラムだという気がします。

18 「不能の性」としての男

しかし、セックスの場面で、男と女に構造上からくるちがいがないかと言えば、そうではありません。唯一の絶対的ちがいは、男はつねに「不能」を前提としているということです。

純粹に構造上の問題だけで言えば、女の方は、成熟さえしていればいつでも性行為が可能です。それに比べ、男の側は、勃起しなければできないわけです。要するに、男がその気にならないことには生殖行為は成り立たせません。つまり、男は、常態においては「不能の性」だということ。男の側に「能動性」を求める事情はここにありません。

19 女性の性の商品化の理由

ましてや、その男の性のエネルギーが（前述したように）まったく別の方向に暴走してしまつて、女性の性器に向かわないのなら、種の保存など満足にできるわけがありません。したがつて、人間を「正常な」性行為に導くためのパッチは、もっぱら男に対してあてられます。世の中のポルノグラフィの99パーセントまでが、男に向けられてつくられているのは、そのせい

です。

そしてそこに、よく言われる「女性の性の商品化」のひとつの理由もあります。つまり、ポルノグラフィ―（あるいは、それに類する商行為）が男に対して向けられるなら、そこで対象（つまり商品）となるのは、当然、女だからです。

（じつは、「女性の性の商品化」には、他にも大きな理由があります。それは、性行為にまつわるもうひと

つ大きな男女のちがいとして、そのあとに女性の妊娠
^ 直立二足歩行での危険な妊娠！v ということがあ
り、その上、そこで生まれてくる子供が、前述のよう
に、大人の保護なしには生きていけない存在であると
いうことです。人間という動物が、首尾よく「種の保
存」を成し遂げるためには、生殖行為だけでなく、こ
の過程すべてが保証されなければなりません。つまり、
妊娠中の女性と生まれたばかりの赤ん坊を保護するシ

STEMがどうしても必要なのです。そこでつくられたパッチプログラムが「家族制度」ということでしよう。

女には「母性」というパッチが、男には「家族を保護し養う義務」というパッチがあてられます。そして、男がその「義務」を免れるという契約の上に、賠償金をあらかじめ払って行われる性行為が「売春」でしょう。そのあたりについては、「結婚制度」なども含め、もっと詳しい分析が必要だと思えますが、本題からだ

いぶそれてきているので、ここではやめておきます。(

20 「らしさ」の中身に根拠はない

以上、長々と述べてきましたが、要するに言えることはふたつあると思います。

第一に、人間には満足に機能する本能がないため、そのかわりに文化による観念操作が必要不可欠だ。そのひとつとして、種の保存をしていくためには、ジェ

ンダーという規範がどうしても必要になるということ。

第二に、ところが、そのジェンダーの中身、つまり「らしさ」として語られることに何らかの根拠があるかといえ、じつはほとんど（そうした便宜的な意味以外には）ないのだということ。

——です。

そこに、TVなどという奇妙なことが起こる原因が

あります。

TVは、ある意味でまちがいなく「異常」ですが、しかし、そんなことを言えば、人間のすべての性行動は「異常」ということになります。私が章頭で、TVは「人間として」異常ではないといったのは、そういう意味です。

五 女装の「動機」

1 なぜ女装したい？

では、なぜ「女装したい」などと考える男がいるのか、そここのところを、もう少し突っ込んで考えてみた

いと思います。

TSの場合は、ここまで述べてきたことでほとんど解決はついていると思います。

先述した4つの性の判別法のもう一段上に、「自己認識」という5番目の項目を加えればいいのですから。それぞれの判別法の間にも食い違いが起こるように、5番目の判別法との間にも食い違いが起こる。要するに、それだけのことです。食い違っている以上、（あいま

いさに満ちた)性の判別に際して自分自身の基準をとるかは、いわば任意なわけですから、自己認識を基準として、他をそれに合わせようとするわけです。

ところがTVの場合、自己認識としては明確に男だと思っっています。にもかかわらず、ジェンダーを「越境してみたい」という欲望がむくむくとわき上がってくるわけです。前章でいった性のエネルギーのあらゆる方向への暴走にはちがいないのですが、その動機は、

「無根拠であるにもかかわらず、けっこうきついパッチとして働くジェンダー」に対する性のエネルギーからの反発にあるのだと思います。

2 努力なしには「商品」にすらなれない男

歴史を振り返ってみても、ジェンダーというのは、けっして普遍的なものではありません。「男らしさ」「女らしさ」の規範は、その地域、その時代の文化の

様相によって、いかようにも変化しています（それがまた、無根拠であるということの証左でもあるのです）。したがって、TVという現象が現れる具体的な道筋も、地域によって、時代によって微妙にちがってきます。ここでは、おおよそ現代の日本ということに限定して話を進めたいと思います。

「女性の性の商品化」について先に少し触れました。ところで、この「性の商品化」については、「商品化

されるだけ、女はいいよな」という言い方もできると
思います。

性の物語の対象として女性が商品化されるというこ
とは、女性はそのままでも「商品」たりうるというこ
とです。少なくとも、若くてある程度きれいなら、そ
れだけで立派な「商品価値」があります。（「市場の
レベル」によつては、「若い」とか「きれい」とかい
うことすら「商品」としての必要条件になりません。）

ところが男の場合、（俳優やタレントなど「鑑賞」の対象となる職種をのぞけば）それだけでは商品とはなり得ません。学歴だとかなんらかの能力だとかがないことには「商品価値」を持ったものにはなれないわけです。

そんな言い方をすると、先鋭的なフェミニストからはひどく怒られるにちがいませんが、生まれたままで商品たりうる女性の方が楽しそうに見えてもしか

たないと思います。

また、「わざわざ商品になりたいのか？」という反論も当然あるでしょうが、それにしても、現実の問題として、現代資本主義というシステムの中では（「労働市場」などという言葉に端的に表されるように）、人間全般が少なからず「商品」として扱われているわけです。最終的には「自分という存在をどれだけ高く換金できるか」が、多くの場合、その人の「価値」と

して見られていることは、誰しも否認めないことでしょう。

もちろん、女性にとって、外見だけで人間としての価値が決まってしまうようなことは心外にはちがいないでしょう。しかし、「男の価値は中身だ」というのも、けっしてラクなことではないわけです。特別の才能でもない限りは、そこには、女性以上の努力が科されるわけですから。

そんなしんどさの中で、ふと脇を見ると、「きれい」なことを自ら楽しみながら、それを「商品価値」として利用している人たちがいる。それがなんだかうらやましくて、時にはそっちの世界に行ってみたいと思っただとしても、そんなに不思議なことではないでしょう。

3 男の方に強い「らしさ」の抑圧

その「努力」や「しんどさ」に関しては、現代では明らかに男の方が（相対的に）大変なのだと思います。

歴史をたどれば、ジェンダー、つまり「らしさ」の抑圧は、つい最近まで女性の側に強く働いていました。わかりやすく言えば、「女は嫁に行くもの」と決められていたわけです。親や社会は、その路線に沿って

女の子を育てます。「男からウケがいいように」「嫁いだ家で気に入られるように」という判断基準のもと、（つまり受け身の）「女らしさ」が強制されてきました。そこでは、自らの選択肢はきわめて狭い範囲でしか許されなかったわけです。

それが、戦後の価値観の転換と、女性解放の機運が進む中で、だんだんと「嫁に行くことばかりが女の幸せではない」ということが常識になってきました。女

の子も主体的、能動的に自らの道を選択することが尊重され、そのための選択肢もたくさん用意されるようになったわけです。かつて女性を縛っていた「女だから」という言葉が、今はむしろ「女だから、自由に生きればいい」という文脈で使われることが多くなっているように思います。

それに対して現在では、男の方が、選択肢が以前より狭くなっています。戦後の受験体制の中で、「いい

大学に入って、いい会社に就職する」ことが、いわば絶対的価値とされ、たいていの場合、その路線に沿って男の子は育てられます。さらに悪いことには、家庭内電化や経済成長のおかげで家事労働や内職から解放された母親が、てぐすねひいてその管理に乗り出すわけです。

その結果どうなるかという点、一方で「男の子なら、もっとしつかりしなさい」などと言われながら日常を

がっちり管理されるといふ（つまり、昔ながらの能動性を期待されながら受動的にしか成長できないといふ）、矛盾した環境で育てられてしまうわけです。

一般に言われる「男らしさ」には、いろいろな意味合いが含まれるでしょうが、その核になっているのが、先述したように「能動性」であることはまちがいないでしょう。「しつかりした」とか「頼りになる」といふのが、「男らしさ」の本質として語られることは多

いものです。ところで、この「しつかりした」とか「頼りになる」というのは、要するに社会システムの中で立派に機能しているということです。極言すれば、「男らしさ」は「社会的成功」と直結しているわけです。そのぶん、受験体制がつくり出すヒエラルヒーに従属しやすくなります。

もちろん現代では、男性、女性にかかわらず、建前としては、その能動性や自主性が重視されます。また、

反面、受験体制をはじめとして、会社でも地域社会でも、（特に、日本では）「管理社会」的な側面が強いのもたしかで、そこに男女差があるわけではありませぬ。家庭における「母親の管理」というのも、べつに男の子だけに向けられているわけではありません。そういう意味では、能動性の訓練がじゅうぶんに積み重ねていないにもかかわらず能動性を求められるという点では、男女にそんなに差はないでしょう。

しかし、いまだ「男らしさ」の概念が「社会的成功」と結びついているぶん、男の方が、ジェンダーの縛りがきつくなっているということなのです。

もっと簡単に言ってしまうえば、（前々章にも書きましたが）マニッシュなことは、女性の魅力のひとつとして許容されても、ウーマニッシュな男というのは、多かれ少なかれ「社会的落伍者」と見なされるということです。いいとか悪いとかは別にして、それが現実

です。

そんなジェンダーの縛りからいつとき逃げ出した
い、あるいは（自覚的ではないにしても）それに反抗
したいという気持ちが起こったとしても、これもまた、
そんなに奇異なことではないように思います。

4 ある日突然言われなくなる「かわいい」

もうひとつ重要なことがあります。それは「ほめ言

葉」の問題です。

人間が生きていく上で、その大きなモチベーションになるのは、他人からの評価です。人からほめられたり認められたり感謝されたりということがなければ、生きていく意欲などわいてこないものです。

ところが、女にくらべて男の場合は、成長の過程で、その評価の（特にその資質に対する評価の）言葉が大転換する時期があります。

赤ん坊から幼児期、小児期にかけて、子供に対して最も多く使われるほめ言葉は「かわいい」でしょう。

そして、「まあ、かわいい子ね」というのは、いわば子供としての全存在を肯定される言葉です。たいていの人は（人によって差はあるにせよ）、そういう言葉を何度も言われて育ちます。自然と、そう言われることが、自分の存在理由の証明のように思えてくるはず
です。

ところが男の子の場合は、「かわいい」というほめ言葉が、ある時期（たいていは第二性徴の過程で）、ぱたりと使われなくなります。これはおそらく、子供にとっては価値観の組み替えを要求されることのはずです。

女の子の場合は、言うまでもなく、そのほめ言葉が長くつづきます。若い女性に対して「かわいい」と言えば「きれいだ」とか「美しい」というのとほとんど

同義なわけです。（もちろん女性の場合でも、本当にかわいくない場合[△]：すみません[▽]、そう言われることは少なくなるのでしようが、それにしても近所のおばさんとか親戚とかからは「まあ、かわいくなつて」などとお世辞を言われたりはするのでしよう。また、女性もある程度の年齢になれば、「かわいい」とは言いにくくなつてきますが、それは、男よりはずつと後、少なくとも成長過程ではありません。）

では、「かわいい」とはそもそもそもそもどういうことなのか、広辞苑によれば「かわい・い..(カワイユイの転)。

「可愛い」は当て字) 1 いたわしい。ふびんだ。かわいそうだ。 2 愛すべきである。深い愛情を感じる。 3 小さくて美しい。」とあります。

つまり、男は、ある時期から「いたわしくなく、不憫でもなく、かわいそうでもない」存在にならなければならぬというわけです。これは、前章までに書い

てきた「受動ではなく能動」ということとほとんど同じことではあるわけですが、それが、最初からそうだったわけではなく、成長の途中で突然やってくるところに男の悲しさがあります。それまで培ってきた価値観が一度崩壊し、組み替えるという作業を経て、男は男になるわけです。女の子が経験しないこの価値観の大転換は、男の子にとってけっこうキツイことだと思います。

もちろん、ほとんどの男は口には出さないけれど、そんな「かわいかった自分」に対する郷愁のようなものを持っているにちがいないという気がします。

その郷愁が強ければ、時には、もう一度「かわいい」と言ってもらいたいという気になったとしても、なんの不思議もないのだと思います。

5 モラトリアムの一形態としてのTV

と、ここまで読んできて気がついた方もいらっしゃるでしょうが、TVというのは、よく言われる「モラトリアム現象」のひとつの現れ方でもあるわけです。

けつきよくのところ、ジェンダーというのが社会がつくった規範とするなら、「男らしい」とか「女らしい」ということは、社会で一人前と認められること、

つまり「大人らしい」ということと同じことです。

子供の頃は、肉体的にも、また意識の問題としてもさほど差のない男女の性別が大人になるにしたがって両極に分かれていく。肉体的な変化はさておき、意識の面では、ボーボワールが女性について言ったのと同様に、男も「男に生まれるのではなく、男になる（される）のだ」と言えます。つまり、それが大人になるということなのです。

「女装したい」というのは、それに対する抵抗という側面が少なからずあると思います。世の中が（勝手に）決めた男だとか女だとかいう規範の中に入りたくない。つまり、「大人にはなりたくない」という気持ちだが、そこには大きくはたらいているのでしよう。

6 置き忘れてきた「もうひとりの自分」

そうしたモラトリアム的心情を是とするか否とする

かは意見の分かれるところでしょうが、いずれにしても、ひとつの方向を選ぶということには必ず、それ以外の要素を捨てていてという側面が付随します。「強さ」を選ぶ（選ばされる）時、そこでは必ず、自分の中にある「弱さ」を捨てている（捨てさせられている）わけです。

本来人間の中に可能性としてあるさまざま要素のうち、「男らしさ」を選ぶということは、自分の中の

「女らしきものを」を捨てるということに他なりません。いえ、捨てるというより、意識の裏側に押しやっけていくということでしょう。いわば、「そんなものは、自分にはないことにする」ということです。そこには、言ってみれば「もうひとりの自分」が置き忘れられることになります。時に、そんな自分を取り戻してみたいと思うのは、「全き人間」として、かなり自然なことのような気もするのですが、いかがでしょうか。

六 女装の「未来」

1 「大物語」が崩れ去る時代に

是とするか否とするかはべつにして、今の世の中が
どんどんモラトリアム的になっていることは、誰も否

定できないでしょう。大人は子供っぽく、子供は大人っぽく、男は女っぽく、女は男っぽく、そのボーダーが限りなくあいまいになってきています。

これは、けっきょく、世の中のパラダイムの崩壊が起きていることと無関係ではありません。国際政治で二極対立が崩壊し、右上がりの経済成長が終わりを告げ、連合政権が誕生し、さまざまな社会システムが組織疲労を起こしている。言ってみれば（成長とか目標

達成、あるいは二項対立とかいうことをテーマとした）大物語が崩壊してきているわけです。以前の章で使った言い方をするなら、暴走しかかる本能というシステムに一生懸命パッチをあてていたら、システム自体がまったく機能しなくなってしまうたり、膨大になったパッチ自身が暴走をはじめたりと、收拾がつかなくなってしまうた、ということでしょう。この上は、「民族の文化」というOSをバージョンアップする以外に

方法はありません。これだけネットワークがグローバルに、かつ高速大容量になっている以上は、さまざまなOSを包含するマルチプラットフォームのようなものが考えられる必要があるのかもしれませんが。また一方で、これだけパーソナルなものが直接ネットワークに結びついてきた以上、OS自体も、異質性を前提とした許容度の広いものになる必要があるでしょう。

そんなふうに大物語の崩壊と組み替えが起こってい

るのだから、当然、「男と女という物語」も大きくバージョンアップされてきていいはずですよ。そして、そのひとつの方向というのは、まちがいなく「異質性の許容」ということでしょう。

2 「性」を徹底的に相対化する

世の中の人間を、男と女というたった二色に分けて、それを基本的に物事を考えていくというやり方は、二極

対立という物語が崩壊した今、いかにも古くさく、時代遅れなのだと思います。

たとえばレイプというような性犯罪を考えてみても、その原因は、よく言われるような犯人の異常さや性情報の氾濫にだけあるのではないでしょう。じつは、伝統的な「男と女の物語」が現実にもぐわなくなってきたことに起因しているような気がします。

早い話、「男は力づくでも女を征服する者で、女は

それをよろこぶ者だ」などという「能動性と受動性の神話」を基礎にした物語を心の奥底に持っている人間が、今、現実の生活の中で女にもてるとはどうてい思えませんか。その結果、レイプ犯は、無理矢理にでも自ら信じている物語を実践に移すというわけです。

こうした悲劇を防ぐためにも、「性」を徹底的に相対化してしまうことは有効だと思います。「性」を固定した絶対的なものとしなない視点を持ってさえいれ

ば、レイプなどというリスクばかり大きなことは、ばかばかしくてできないはずです。人間を男と女という二項でとらえるのではなく、つまり、「男らしさ」「女らしさ」というジェンダーの縛りを一度捨てて、もつと多様な存在としての「性」を見てみるのが大事なのではないでしょうか。

3 「らしさ」のない愛は可能か？

とは言え、もともと規範性の弱い（つまりバグだらけの本能を持つ）人間が、何らの規範（つまりパッチプログラム）もなしに生きていくのはとうてい無理でしょう。

性に関しても、二人の人間が、社会的文化的規範なしに、つまり、あてはめるべきなんの物語もなしに、独自の存在として、愛し合い、セックスできるとは、

やはり思えません。

また、そこに何らかの物語を紡ぐ以上、二人はそれぞれに役割を演じる必要があります。そして、役を演じるには、当然、その役「らしさ」が必要になります。愛と性のシーンでは（たとえそれが無根拠であつても）「男らしさ」「女らしさ」を演じなければならぬでしょう。そういう意味では、「らしさ」のない愛は、不可能だと言つてもいいと思います。

ただ、それは、あくまで「役」なのだと心得ておくことはできると思います。愛と性のシーンで、何らかの相対化ができるとしたら、それは、その役、つまり「男らしさ」「女らしさ」を、つねに取り替え可能にしておくということです。(※注6)

※注6 ある方から「そういう無責任なことを言っているから、男と女が結婚しなければいけない」という意識が薄れ、子供の数がますます減り、高齢化社会になるのだ」というご批判をいただきました。

しかし、そうした「少子化現象」というのは、日本という国家、あるいはせいぜい先進数カ国という枠内で見た時の問題であって、地球全体から見れば、どんどん加速度を増しながら「人口爆発」がつづいているわけです。それは、「人道主義」の名の下に、じつは未開拓のマーケットに期待して、（教育などを含めた全体的な民度の向上など考えもせず）「経済援助」や「医療援助」をしている先進諸国の身勝手さに起因していることではあるわけですが、いずれにしても人類全体で解決しなければいけない課題は「少子化対策」などではなく「人口抑制」です。そうした意味からも、人類を「性の奴隷」からスポイルすることは、けっして悪いことではないと思

ます。

4 「越境」II 人間 “性” の多様さを楽しむ

論理に繰り返しが多くくどくなってきた感じがしますから、ここらあたりで、いちおうの結論をつけておきたいと思います。（私自身が決定的な結論をもっているような問題ではないので、あくまで「いちおうの」です。）

この章に「女装の『未来』」などという章題を付けましたが、私は、「女装」という行為が、人類の未来を切り開くなどという大風呂敷を広げるつもりはありません。「女装」などということは、あくまで、個人の嗜好に添った趣味に過ぎません。

ただ、いまだ絶対的なものと見られることの多い男と女という「性」を、なかんずく、けっして絶対的なものなどではあり得ない「ジェンダー」を、強引に「越

境」することで見えてくるものというのは、けっこう重要なことなのではないかという気がしているので。

女性はすでに、それをはじめています。

男も（「女装」とまで行かなくとも）、「性」に対してそんな相対的で柔軟な視点を持つことが、大物語が崩壊していく時代にはぜひ必要でしょう。未来にわたって異質でパーソナルなものどうしがよりよい関係を

持ちながら共存していくためにも、そんな視点が有効なのだと思います。

「らしさ」をくつがえすというのは、いわば「よりどころを失う」ということでもあるわけですから、けっこう苦しいことです。でも、苦しいことなら、たとえばスポーツで練習の苦しさを楽しみに転化してしまうように、それを楽しんでしまえばいい。

TV、女装というような行為の中に、私は、そんな

積極性をかいま見ているのです。

あとがき——「小説」のスタンス

この小論は、私がこれまで書いてきた「女装小説」を、シェアテキストとしてオンラインにアップするにあたり、一般の読者の方に、「女装」という行為をなるべく偏見なく見ていただく必要を感じて書いたものです。

しかしながら、実名でこのテキストを書いたスタンスと、「前橋梨乃」名で小説を書くときのスタンスは、自ずとちがいます。

たとえば、この小論では、TV、TS、ホモセクシヤルのちがいを厳密に分けるところから論じていますが、小説の方では、逆に、そこをあいまいにした表現をしていることが多いと思います。

それは、小説は大多数の人の共同幻想に依拠した表

現であり、また一方で、その共同幻想が内包する矛盾をモチーフにして成立するものだと思うからです。T Vなのか、TSなのか、ホモなのか、区別がつかないような状態で起こることが面白いわけです。それ以上の解釈は、読者にゆだねるべきでしょう。

本来、私が書きたいのは「面白いお話」であり、分析や解説や、ましてやメッセージではありません。

さらに言うなら、私の小説は、「現実の存在として

のTV」を書いていられるのでありません。

主人公たちは、あくまで、お話の中の登場人物なのです。現実には女装する男が、私の小説の主人公たちのように「きれい」なわけはありません（たいていは、どう鼻屑目に見てもやっぱりどこか「気持ち悪い」存在です。中には、百人にひとりくらい、本当に「きれい」な人がいることは事実ですが）。しかし、要するにそれは、ふつうのエンターテインメント小説でも、

主人公はたいてい美男美女であるというのと同じこと
ですし、女性の中にも、美人もいれば不美人もいると
いうのと変わるわけではありません。

エンターテインメントの持つ力というのは、いつと
き日常を忘れ、常識を忘れ、その世界に入り込んで楽
しむうちに、私たちががんにじがらめに行っている日常や
常識が相対化されてくることなのだと思います。だか
らこそ、いわば荒唐無稽な話をそれらしく読ませてし

まう力技こそが命だと思っ
ています。要するに私は、
「多様な性」のひとつの
可能性として、かなり無理
な話を「こんなことがあ
ったら面白いでしょ」とい
うス
ダンスで、女装小説を書
いているわけです。けっし
て、
それ以上のものではありません。

ともかく、小説は、作品
として（現実からも、私
自
身からも）独立したもので
す。

そういう意味では、この
テキストはまったくの「蛇

足」です。ここまで読まれた方には、とりあえず、「女装」という行為は、そんなに特異なことでも、またひどく異常なことでもないのだということのを頭のはしにとどめる程度にして、それとはべつに、エンターテインメントとして小説を楽しんでいただけたらと思っ
ています。

トランスベインズムについて

What's TV ?

CopyRight 1996 by 立石洋一

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、
および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Free